

陶磁器に見る蜃気楼図

魚津埋没林博物館 石須 秀知

はじめに

蜃気楼図は主としてハマグリが吐き出した気の中に楼閣を描いた図柄で、中国を起源として江戸時代前半ごろに日本へ伝来したと推定される。

当初は中国の珍しい現象あるいは妖怪の類として、後には縁起の良い文様的一种として、絵画や各種工芸品などに描かれるようになった。

やがて染付や色絵の磁器が量産され庶民の器としても普及してくると、その意匠の中にも蜃気楼図が取り入れられるようになったと思われる。

量産陶磁器の蜃気楼図にはさまざまなバリエーションが見られ、その変化の過程を推理する楽しみを紹介する。また、蜃気楼図のハマグリに関する疑問を考察する。



蜃気楼図についておさらい

蜃気楼は、中国の史記にある「海旁蜃氣象樓台」を語源とするとされ、「蜃」には **龍の仲間の一種と大型のハマグリの仲間の2種類の意味がある**。本草書などの記述から、の蜃が本来の意味と推定されるが、字が同じでより身近な との混同が起き、後にほぼ置き換わってしまったと考えられる。そして中国で の蜃が吐き出す蜃気楼図の原形が生まれ、江戸時代には日本に伝わったと考えられる。陶磁器の中には、龍が楼閣を吐く図も散見されるが、本来の意味の蜃気楼を意識したものか、海と楼閣から龍宮を連想した偶然的回帰なのかははっきりしない。



陶磁器の蜃気楼図

陶磁器(特に磁器)が大量生産されるようになると、絵付師は各種の模様をあまり時間をかけずに描けるように習熟しながら、図柄も簡略化したと思われる。また想像であるが、複数の窯元の間で絵柄の模倣が行われた結果、本来の意味を理解しないまま伝言ゲーム的にさまざまなバリエーションが派生したようである。たとえば、

- ・ハマグリが別の種類の貝に変わる
 - ・吐き出されるのが楼閣以外のものになる(雲龍、山、扇、点など)
- などが代表的なものである。



巻貝への変化



アワビへの変化



へへの変化



雲龍への変化



山並み?への変化



扇子?への変化



ホタテ風の貝+雲龍への変化

ハマグリ突起の謎

陶磁器の屋気楼図の多くに共通して、ハマグリの殻の頂部(多くの図では下に描かれている)の両脇に、ある種の突起が描かれている。あるものでは三角形でホタテガイの耳状突起にも似ており、あるものでは丸い耳状に、またやや足状に伸びているものもある。この突起がない方が例外的といえるほどである。

この突起の起源はハマグリのやや突出した“ちょうつがい”と思われる。図案化の過程で本来片側にしかないちょうつがい単純化された三角形の突起として描かれ、やがてホタテガイからの連想か、両側に三角突起が描かれるようになり、さらに突起が丸耳状や足状に変化したのではないかと推測している。

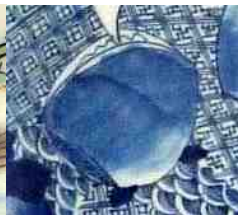
ここでも、その図本来の意味が理解されずに伝言ゲームが行われた結果、一種の様式として固定されてしまったのではないだろうか。



三角耳状



丸耳状



足状



ハマグリのちょうつがい